夜すがま

玉しろう 并八

哥の詞を名ごとに

[V.30]

PL788
.4
.G4
1654
vol.30
copy 1
Asian
Japan
Legl

2004551302

内侍のかみの御家づゝへのことをこれもくそゞの
かし給もいかるらん親とせひこそ御人の御こゝろ
ざまうちとくまじき世なりけれバまして さやうの
まじらひにつけて心よりおこびんなきこともあら
ば中家も女御もかるゞにつけて心をさ給ちゞもし
こゝろうらんに我身はいかくしらるさ御にて いゞ
るにもかくせひとゞめられなかほどもなく
あさ紀常しまてこゝろすせひいひいゞで人ゑへなり
さ御に三男なきんとうけひ給人ゞもおほくさかく
につけてやすらぬことのこゝろぬべき我 物おぼし
しらまじき程にしあらねバさ御ぐにおもほし見

ぞれ。人をわれず地なげし。さりとてうらまさ海もお
しきことはなけれど。このおとゞの(係)れこころざし乃。
むつしく心づきなきもいうなりけいでてりうは
もてなされて。人のをしたるべかあるすぢを。心ぎ
よくもありたるべき。まことのちくおとゞも(は)。此(係)の
おほさん所をたゞうりまて。うけぢりてとりたるち。
けぎやぎまべきことにもあらねばなれとてもかく
てもこゞろしうかけゞしたき貴さ海にて心をなや
まし。人にもてさはがるべきこゝなりと。申ここの
おやこゞも罪しまて後はことにはゞうり給気女を
なさ。おとゞ(係)の志のれまてなしをとりくさへけく。人

まれぞなんなげかしかりけるもひごとを。まほなるぞ
ともうるさしまてもうちうすめけべき女おやもお
もまず。いづるもく。いとまづしげり。いとうな
ましきれさ夜どもりも。なまごとをうは。さるん
もなんともこそてつさ給ちん。世の人りまぬ
男の有様をうちながめつ。夕菅の元の袁げなる気色
をまゐ（ゑ）ちりくてこ出し給へ。なさ夜いとおし。うすさ
大宮ノぶくこうせ給ふ三月廿日夜のうち菅ニ在
まび色のれぞ。なつしき程にやつれて。れいりゝ
もりさる女あひましも。かたちはいと並やうにもて
もやされておいすりを。れ前なる人ぞいうち思えて
こなるに。宰相の中将（夕菅ノ宰相宮ニ給ヘテ云内）おなじ女の今すらしこ夜やう

さられ心しのへなどやうのすぢなりいしへ給いん
こともなく。うちなげきのへなほど。志のびやうな
うつくしういとなつかしきる。れえ志のぶまじく。れ
ぶくもこの月まはぬがをのべきを。日のいでなん
よろしうしざりけり。十三日にかえしへいでさせ給
べきよしの給いたれ。なるがしもれともまさふふ
べくなん。心のふかとをきてしのへだ。ふぐひ之面をん
もことくしきやうにや侍らん。志のびやうにて
とそよく侍らめとののふ。この れぶくなぶくなくて
しきさ面を。へにあまねくしらせじと。をもひけ
のへるそしきいとらうあり。中ぬ とらさじとの

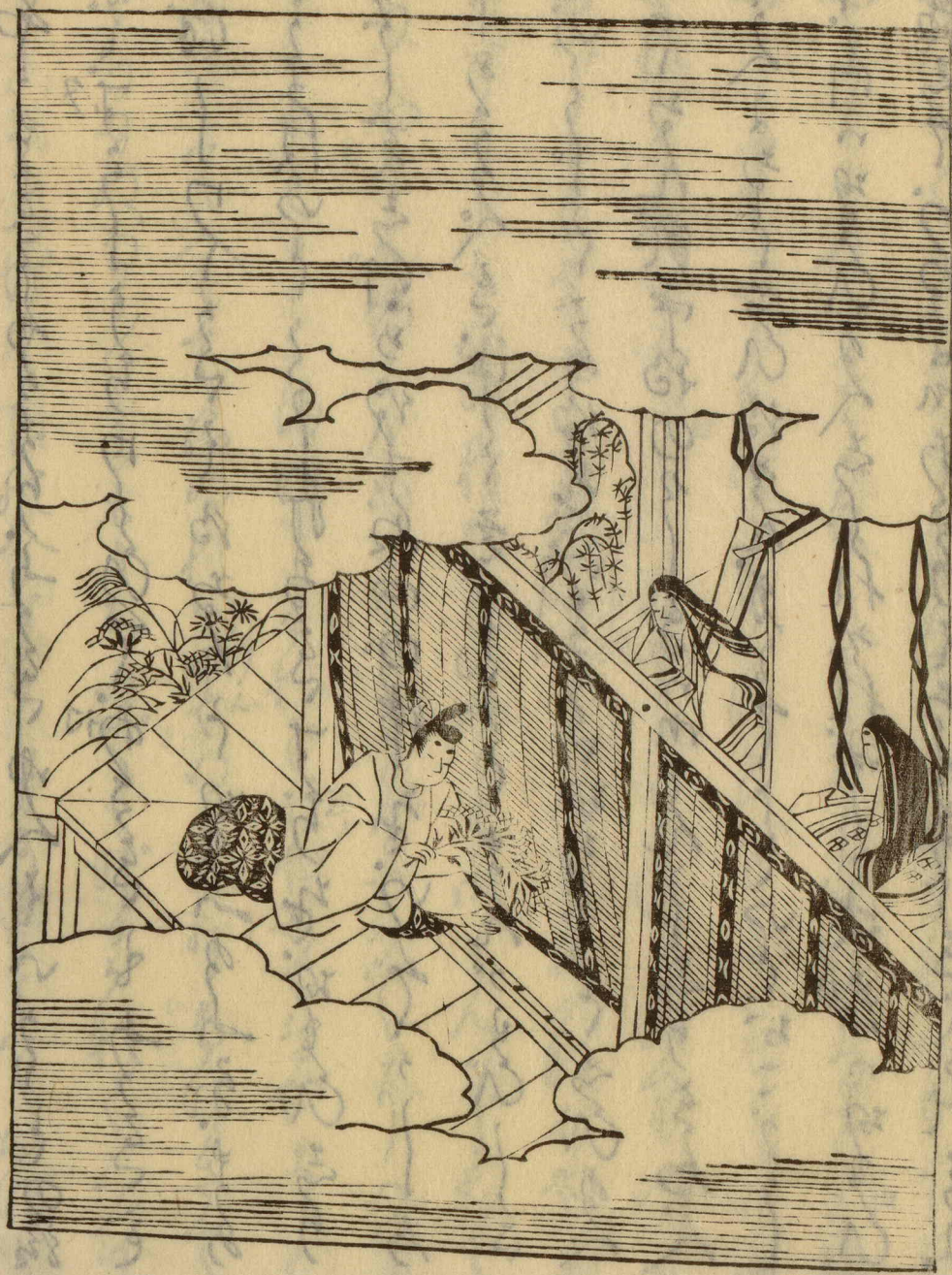
まさ給ふんとそ心うけれ。しのびがたくおもひ給へ
らるゝかたゝなれば。ぬぎ捨給ふんこともいと抱うく
給ふ事なれを。さてもあやしうもてゝなれぬことの。
タガ羽ノ事をタヾ羽のさう給ふ事なるべし
又こゝろえがたゝまゝとそ給れ。此れあらりし衣乃袋
なくは。えこそ出給へ。つくまじかりけれとの給へば。
(むかし)何ぞ。もせひ給ふ心ゝは。まして。ともかくもせふ
給へ。毎ざれ給ふ。ぞ。かゝいろこそあやしく抱
衣なりつゝざま給りけれとて例(地)よりもしめりしかれ
気色いとらうたげにおしうかゝ(タノ)家にいでまさや
せひよりけん。(蘭花之)らまの笠のいと面白きをもの給へ置
けりを。三寸のつまよりさし入て。是もれんずべき

蘭 其の女あれば之又兄弟にたとへたり

ゆへいまかりとて。とゝまもゆるさでもとまへれば。
うけこへまさひもらしで（むノ）とり給ひ袖をひ（タノ）さうご
うしこゝ

（タ）おなじ堂の露にやけるしゆぢぢう面衣は
かけよがごとぢうりも。こちのまてなるとゝや。（むノ）いと
心づきなくうとて成ぬれど。こゝしらぬさ面にやを
らひきいりて

（む）こげぬるまちうけきのべの露なしばうと
むしさきやがごとなしまし



あはれどつねでをこがんて。をのが心まゝをんことハ。
あるまじきことなりとの給。うちく（夕詞）（六条院ノうちくと）よもやむごと
なき（女中衣）をれ。さしごろ屋てまれしゐへハ。えそ乃
すぢの人かずまは物志給りですてがてらまかく
ゆづりつけ。大ぞうの女づゝへのすぢかりろうどん
とおぼし（源ノ）をきつゝ。いとかしこくかどあること
なりとなん。よろこび（源ノ）申されけるとこしかる人の
ろうり申給しなりといとうりしき後まかり
申ゐへバ。げ（源ム）にさはせひ給ふんかしとおぼすまいと
おしくて。いと（詞）まがくしきすぢまもせひより
ゐひけるかれ。いろりふるき仏心ならひなるんかし。

今をのづからいづるまつけてもおしはかるんこと
ありなん。おもひぐ歯なしやとつらひ給。れ(りん)紫文を
けぎやうなれど。れうるがひはおほうる。おとぐ(源ん)もさりや。
うく人のをしもうる。おんまおつうこともおしまし
うばいと口おしくねぢけたらまし。うれおとぐ(れ)ま。
いうぞうく心ぎのきさ歯をもしをもしんとおぼ
すまぞ。げまこやづく人のすぢまて。けぎやうなる
ちじく。まぎれたるおぼしをうしろくをさひより
給けうれと。むくつけくおぼさう。うくて(池)れぶ(むり)くな
どぬぎなて。月こそばちをまつり(入内ノ事)給りんこといふ
あるべし。十月ぐらりまと見しの給を。うちまも(冷)

なのく心もとなくぞせひける。臥中ね。ころをつ
ろし俺しことはいかさこしまこ家をうちつけ
なれ心かれと。人ぐはおしがるは。夜のれけりひ
まておりしたり。れまていでず悪びやうはれをうそ
こなどもきてしかるし給はれば。月のありさ夜。
かつらのかげはかくれてまれしまへ事。こうさくへ
べくもあらざりしを。名ばなくこれこのこす志
まへはすへなり。こづかし事し給はんことはしを。
なをつてましかれば。寧ねの悪していらへきこて
給なるはがしをえしひてなりまへるは人づてなるぬ
れをうそこまこそ侍しめ。かくまれどをくても。

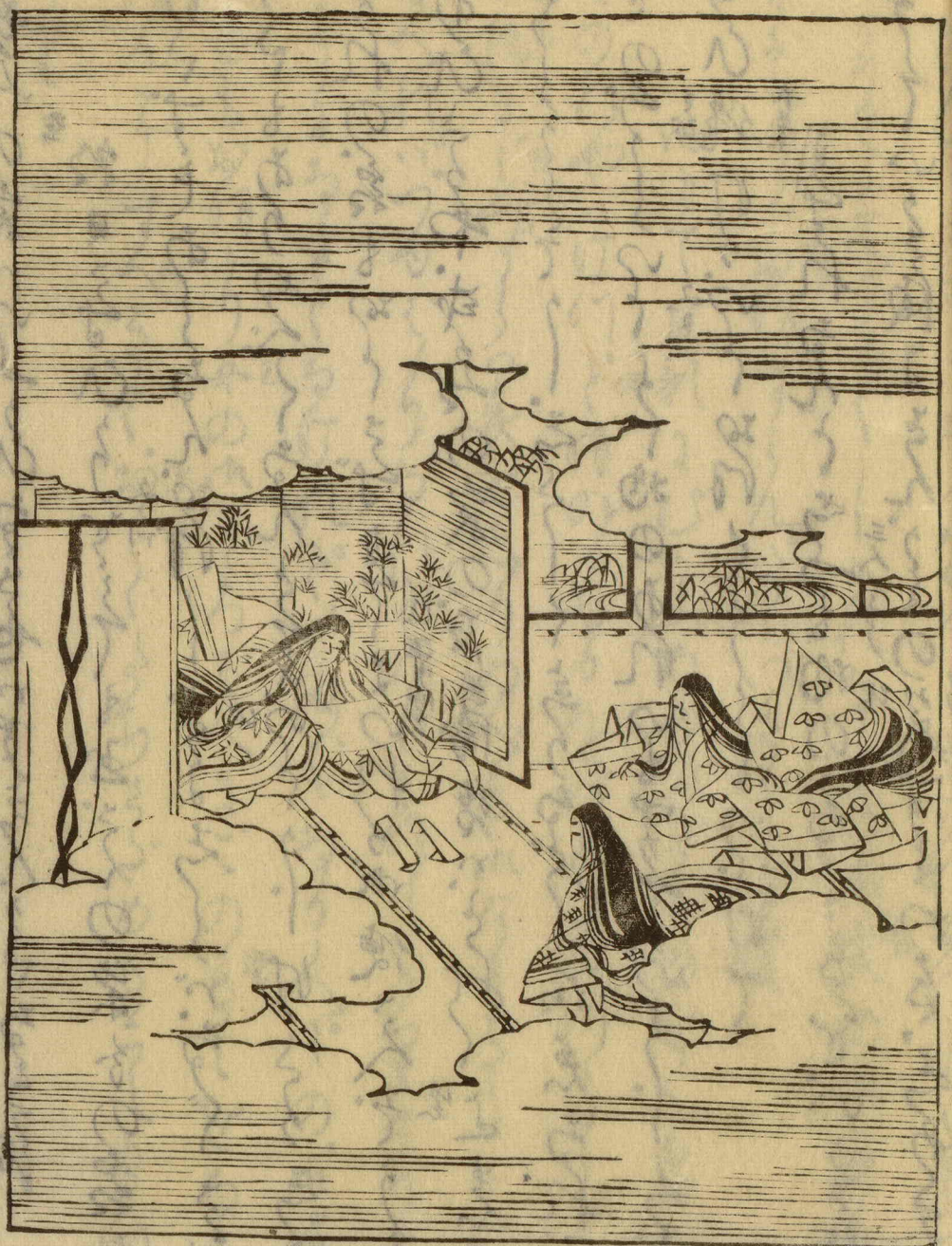
いうじきてしさすべからん。身づしてそうずるも
給ふほどこゝぬことひも給ふりをいかりぞや
こゝいのことなれどこれもしくぞせひなへけり
とて。おれしとせひなへり。げに年ごろのけまりも
とりそへて。きてしまけしかれど。日ごろあやまく
なやましう給れば。おきあがりなどもえし給ふで
なんうくまでとゞめ給も。中こうとくしき心
ちなんし給けりといとまめごちて笑し出し
なへり。なやましく御行さうらん。此事のまとをば
ゆりさせ給まじくや。うしくげにきてしさすりも
心ちなりかりとて。おとゞのれせうそこども。きび

やうに罪ゝ給ふ。よういなど人にはをとり給はず。いと
めやすし。まいり給はんほどのあかいふもしさき風
もえさうぬをうちくにの給はんなんようらん。
何ぐりも人めにもぐりて。えまいりこずさきてぬ
ことをなん。中ゝいづきくなばしうなどうる
ゆきさて給ついでに。いでやおてがましきことも
えぞきこしさきぬや。いづるにつけても。衣をば
ぬらんじすぐすべくやはありけると。いよくうし
めしさもそひ給はれ。まづは今夜などのれもて
なしよ。さるおもてぶつるにめしいれて。君遊こそ
めぎ風さくも覚しめさめ。しもづ人などやうの人ぞ

しくぞこれもふくえし。いづるのゆへとなん。えお
ぼしワかざありしなまぶすもワりなきまで。大方の
よをよ(ジノ)ぐらしを給めれば。え冥しさを給ちぬこなん。
をのつくらくのこも給しじとさてゆうも。さ(拍ん)な
ことなれば。よ(河)しながねし給らんも。さ(ゆ)ゑしき
明どなり。やうくらうつもりてこそいかく(格勤をこうんへ)こんをも
とてこちぬふ。月(地)ゑ海なくさしあがりて。そしれ
なしさもえんなるに。いと(拍ノ)あてやかなきこうげなる
かたちして。はなをしのすがたこのましうぞれ
やうりていとおりし。寧(タ)ねの中将のけちひあ皇
さ海にはえなしび給ひ。これもおりしかあなる。

いかでかかれあるしひありそんと。ワうさんぐさ。
例のさうまじさことをも。とりそてめであへるも。
ちねいこの中ねとおるじ右のまけなれば。つねに
よびとりつ。ねんごろまうしひ。おとぐりを卩
さを給わり。へがしもいとよく。おほやけのれうし
ろこと。なるべかりしうるなるを。おどかは
あしんと思しなかし。かれおとぐのうく志あへる
ことをいかぐいさてしかへすべかしん。さるやうあ
ことまこそと。そろえあへるすぢさへあれど。
まうをきてしあへり。この大ねは甚安の兵れのれくら
うしりぞおりしけり。おとぐこうをなさまりて。

いるなりとうちくのかしきも、さるかうはしき
ようしあれば、まり男て、ふぐ、おほとれくれをも
むけのことなるにそいあるれ、まことのおやの
れ心ざまうがいずちと、この年のれもとくまもを免
ゆふ九月にもなりぬ、ちつ和むすばれ、えんたすり
朝に、例のちりぐなるれうしろうどもれ、引そだこ
つまてまいるれ、ふこどもをこゆふこともなくて
よこ男ゆるぞうをさく給、大ねどのこは、れしれん
うしもをひそのかしきこそこうろびくしかし
いずなしいとひもをまし長月に命をうろ行ぞ
もうなき月ふくぞとあるさゞめをいとらく男給なあり



69038
6AP78